

回 顧 録

京都大学名誉教授 高 田 理 夫

防災研究所が昭和26年に創設され、ここにめでたく 50周年を迎えられまして、慶賀に堪えません。

創設間もない同年6月1日付で助手に採用され、昭和62年停年退官まで36年間お世話になったが、振り返れば実にいろいろのことがあった。何れも懐かしい思い出ではあるが、忘れられないのは井手観測所での度重なる電線の盗難と約1カ月の間に2度も受けた水害の事である。採用されて間もなく佐々憲三先生から井手地殻変動観測所を整備し、伸縮計や傾斜計を設置し連続観測をするようにとの命令を受けた。この観測所は京都府の南部綴喜郡井手町字上井手の東部山中に残っていた銅鉾山の廃坑を改修したもので、高さ約1.8m、幅約1.3m、長さ120m位の素掘りの坑道の奥にある長さ約7.5m、幅約2.3m、高さ約4.5mの坑道の一部を観測室としたものであった。

1) 電線の盗難

戦後の混乱期、銅の値段は高く各所で電線の盗難事故が発生していた。当観測所は集落より約500mも離れ、使用電気量も少ないため電力会社は坑口まで線を引いてはくれず、自前で山中を引込み線を引いていた。無人の観測所の引込み線は電線泥の餌食となり度々盗難に遭った。最初警察署に盗難届けを出しに行った時の事、係の警官が盗まれたのはいつ頃か聞くので何日の何時頃と言うと、げげんな顔をしてどうして盗難の日時が分かるのかとの質問。現像したばかりの濡れた記録紙を取り出し、タイムマークから盗難の日時が分かること説明をすると、便利ですぬと感心され、こちらは滅入っているのにと妙な気分であった。その後も2、3回は盗難に遭ったと思うが、盗難防止のため鉄線と一目で分かるように裸鉄線に変えようと電力会社へ相談に行った。係の人は事情はよく分かるが、保安上のこともあるので被覆の鉄線にして欲しいとのこと。しかし被覆してあれば外見上銅か鉄かが分からず、今まで同様盗まれるのではと主張し、やっとのことで、事故が発生したときの責任問題もあり、大学が内密でやったということにして、裸鉄線にすることを黙認してもらった。しかし坑内の電圧は下がり苦勞した。

2) 二度の水害

昭和28年8月14日 夕方から雨は次第に激しさを増し、夜半には雷を伴う豪雨となり、15日未明にかけて南山城では総雨量400mmに達する所もあり、各地で大きい被害が出た。南山城水害と言われるものである。井手町では豪雨と玉川の上流約4.5 km山中にある、この近在では最大と言われていた大正池や二ノ谷池の決壊で大きい被害を受けた。15日佐々先生に玉川沿いの観測所は被害に遭っているのではと申し上げると、早速現地に行こうとおっしゃって川勝安太郎会計掛長に、当時化研と防災研で共有していた車の手配を依頼され、昼過ぎ佐々先生、川勝さん、私の3人は化研の岡本さんの運転で井手へ向かった。24号線を南下、寺田、長池を過ぎ、道が木津川右岸堤防に上ると右は泥流の木津川、左は泥水の沼、井手町に近づくと水害の惨状が目に入る。車で上井手まで行ける状態ではない。車を後に3人は泥水の流れる玉川の堤防に行くことにした。流木が横たわり、決壊した所に土のうを積んでやっと通れるようになったばかりの堤防を進む。間近に見る被災地の惨状は物凄くものであった。水で洗われて凸凹になった坂道を上りやっとのこと上井手に着いた。狭かった玉川は土砂に埋まり、泥流が谷一杯に拡がり観測所への道は流されて無い。やむなく山の中を進み対岸から様子を見ることにした。道もない山の中は木や草が茂り、蔓や茨でなかなか進めない。半袖のため腕が擦れて痛い。ようやく観測所の対岸と思われる所までたどりついた。谷一面の泥流や土砂、それに流木で様子が変わっており、観測所らしい物は見当たらない。少し上流へ進むことにした。やや行くと削り取られた岩肌にはぼっかりと口の開いた坑が見える。観測所だ、あった。先生から明日になれば水も引くだろうから人を連れて坑の中の様子を調べ、修理の必要な計器を持ち帰るようにとの指示を受け帰路についた。

翌日近所の高校生3人を雇い現地へ向かった。泥流を渡り昨日見つけた坑に向かう。坑は水面から1m程の高さ

のところにある。中を照らすが無も無い。観測坑とは違う別の坑である。手分けして付近を探す。3~40 m 下流の草むらの中に30cm程の穴らしいものが見つかった。持ってきたシャベルで前を掘ってみる。確かに坑である。中を照らす。泥水が貯まっている。水面の上に50cm位の隙間がある。1.3 m 位は水が貯まっている。竹の棒を入れ探ってみる。土砂も相当奥まで貯まっているようだ。水と土砂を取り除かないと中には入れない。仕方なく帰ることにした。

17日に状況を報告すると、川勝さんから化研の消防ポンプを借りて排水してはとの提案があり、翌日ポンプを借りて川勝さん、西正男さん、小林年夫さん、化研のポンプの操作出来る人と私の5人で観測所へ向かった。玉川下流の国道から2 km余りの坂道を交替でポンプを担ぎ、ガソリンやシャベル、鍬等の作業道具を携え、真夏の太陽の照りつける中、汗をかきながら現場へと向かった。ようやく坑口に到着し、排水。水位は徐々に下がり、坑口を埋めている土砂が見えてきた。1m以上は埋まっている。シャベルや鍬で土砂を取り出す。多少水が残っているが体を屈めれば中に入ることは出来る様になった。4人は懐中電灯を頼りに、頭を岩にぶついたり、腕を岩で擦ったりしながら奥の観測室に入る。計器は完全に浸かっていたのだろう。泥を被っている。持ち帰り修理する物だけを運び出し、観測所を後にした。

早急に観測所の復旧工事をしなければならぬ。地元業者は他の復旧工事に多忙で引き受けてくれない。人を雇い直接するしかない。地元の農家の人を雇い一緒に復旧作業をすることにした。炎天下での連日の作業は苦勞の連続であったが、坑内の土砂の除去、引込線の復旧、現地での計器の修理、持ち帰った計器の修理も終え、ようやく観測が再開できたのは9月20日頃であった。

苦勞しての観測の再開から束の間、9月25日夕方、台風13号が潮岬に上陸して北東に進み、京都でも強い風雨に見舞われ、各地で被害が発生した(宇治川もその時増水し、水理実験所の対岸付近が決壊した)。井手観測所は玉川が増水し、再び坑内に泥流が浸入、土砂に埋まり、前回と同様な被害を受けた。早速地元の人を雇い復旧工事を行った。作業する人も2度目で経験もあり、前回のように試行錯誤することも少なく、10月半ばには観測を再開することができた。振り返れば2ヶ月間苦勞の連続であったが、今では忘れられない懐かしい思い出である。

お世話になった佐々先生、協力していただいた川勝さん、西さん、小林さんたちは既にこの世を去られた。當時を思い出し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。